

今月とはとにかく読みやすく楽しいおすすめ本を紹介！

冬休みは是非読書に勤（いそ）しんでもらいたい（「いそしむ」って、この漢字を使うんだね。「今でしょ」の林先生が出題しそうな読みだ！）ということで、今月は、「もうこれしかない」というとおきの作品を紹介しよう。

「はじめての文学シリーズ」

日本を代表する 12 人の作家による、**はじめての読書**向けに**本人自らが選んだ**作品集。

表現も平易なものが多く、長いのも 50 ページくらい。短編小説と呼べるサイズで、見開き 1 ページのショートショートもあるし、10 ページくらいのもけっこうある。しかし、そこは一流作家、それも数多くの作品中から本人が特別に選んだものだから短くてもいろいろと仕掛けがあって面白い。それぞれのの中からオススメの作品を紹介しよう。

まずは**村上春樹・よしもとばなな・川上弘美・桐野夏生**の 4 人。この人たちは海外の文学賞の受賞（またはノミネート）歴がある国際派作家だ。

村上春樹の長編は難解なものもあるが、文章自体はすごくリズムがよくて読みやすいから短編はおすすめ。ボクシング好きの筆者は「沈黙」という作品を偏愛している。作者自身はこういうド直球の作品は苦手らしいが、筆者はこういうのが好き。わかりやすくてセンスを感じる「鏡」もいい。

よしもとばななはイタリアの文学賞をたくさん受賞していて、海外では村上に次ぐ知名度がある。日大芸術学部の卒業制作である「キッチン」はもちろんいいが、教科書にも載っていた「パプーシュカ」を推しておく。この集には入ってないが、筆者はよしもとの短編「みどりのゆび」が大好き。また、これは長編だが彼女の作品では何と言っても『T S U G U M I』が最高。読後、主人公のつぐみが何ともいとおしくなる。

川上弘美は 60 代の元高校国語教師（松本春綱という名前だ）と 30 代後半の教え子「ツキコ」さんの恋愛を描いた『セイセイの鞆』で有名になり、これで国際的な評価が高まった（すごく日本的な世界を描いているのにね）。集中には、この作品の番外編「パレード」もあるが、これは『セイセイの鞆』を読んでからの方がいい。代わりに「草の中で」を挙げておくがこれは深い。これこそ文学だ、と思う。

桐野夏生は先月号でも触れた。「アンボス・ムンドス」がすごい。設定が見事。「若い女の子の残酷さ」（これは既に文学的テーマだ。太宰治「カチカチ山」を是非読んで）を完璧に描いている。桐野は教育現場についてもよく知っているなあ、と感心した。女子プロレスの世界を描いた「嫉妬」もすばらしい。これは誰もが共感できるのではないかな。